

「教育臨床総合研究16 2017研究」

親の離婚を経験した児童に対する教員からの支援 (2)

— 実際に親の離婚を経験した大学生への面接調査 —

The teacher's supports for the elementary school students who have experienced their parents' divorce (2) : An interview study with undergraduates who have experienced their parents' divorce

立花 春 菜*
Haruna TACHIBANA

石 野 陽 子**
Yoko ISHINO

要 旨

本研究では、先に行われた親の離婚を経験した子どもに対する教員の意識調査結果をもとに、実際に親の離婚を経験した大学生に対して面接による意識調査を行った。その結果、親の離婚を経験した子どもに共通する感情を抽出することができた。これらのことから、教員は親の離婚を経験した子どもに対して、他の子どもの目に見える形で支援を行わないこと、親の離婚についてしつこく話を聞き出したりしないこと、親の離婚を経験した子どもたちの気持ちを理解しようという態度を子ども自身に示すことが大切であると考察された。

〔キーワード〕 親の離婚 教員からの支援 児童 大学生 面接調査

I 問題と目的

今日、多様な家族形態が認められていく中で、「ひとり親家庭」がその増加に伴い注目されるに至った。厚生労働省が2014年にまとめた国民生活基礎調査によると、1975（昭和50）年には37.4万世帯であった母子家庭は2013（平成25）年には82.1万世帯にまで増え、2014（平成26）年には73.2万世帯に減少したものの約40年の間に2倍近く増えている。一方、父子世帯も、1975（昭和50）年の6.5万世帯から2014（平成26）年には10.1万世帯に増加している。

また、総ひとり親家庭世帯に対する離婚を理由とした世帯について、厚生労働省が2011年にまとめた全国母子世帯等調査によると、総ひとり親家庭世帯を100%とした場合、1983（昭和58）年度に49.1%であった母子世帯は2011（平成23）年度には80.8%に、1983（昭和58）年度に54.2%であった父子世帯は2011（平成23）年度には74.3%に増加している。これらのデータからも実際に、「離婚を理由としたひとり親家庭」は増加しているといえる。

親の離婚を経験した子どもについての研究は近年様々な視点から進められている。そのうち、

*奥出雲町立三成小学校

**島根大学教育学部初等教育開発講座

棚瀬（2004）の離婚を経験した子どもの四つの事例分析を通じた離婚が子どもに与える影響についての調査がある。この研究から、棚瀬（2004）は、「学校をはじめ親族からのサポートの薄さ等」は、親の離婚が子どもに悪影響を与える条件となると述べている。

また、離婚による養育環境の変化が子どもの成長にもたらす影響について、社団法人家庭問題情報センター（2005）が調査したものがある。この研究から、平松（2005）は、離婚について子どもが最も大きなマイナスと考える傷や悩みは自己感の傷つきや喪失であり、それは他者との関係や社会との関係へ発展していくと述べる。そして、離婚に伴う様々なストレス下にある子どもたちが離婚を乗り越えるために何よりも必要なことは精神面のケアであり、子どもたちと日頃接している教育関係者には子どもたちの心を理解して話を聞くことが望まれると述べる。

さらに、藤田・石田（2014）が行った、親の離婚を経験した子どものケアに関する教員の意識調査によると、親の離婚を経験した子どもに対して、教員の中には、自分の理解や対応が適切であるかどうかの不安や戸惑いを持つものもいると述べている。また、教員に対する質問紙調査によると、「勤務校において（親の離婚を経た）子ども達への支援体制が整えられている」という項目を肯定したのは10.7%にとどまり、半数近くの教員が、「（離婚の）子どもの理解や支援についての校内研修が必要（47.5%）」、「（離婚の）子どもの支援やケアのプログラムが必要（45.9%）」と考えている実情にあったと述べている。

このように親の離婚を経験した子どもに対して、教員には精神面へのケアが求められているにも関わらず、実際には教員はどのような対応をすべきか悩んでいることが分かる。実際に、離婚を経験した子どもに対する具体的な支援についての研究はほとんどない。

これらの研究から、親の離婚を経験した子どもたちにとって、教員の働きかけは、時に、両親の離婚により傷ついた心に大きな影響を与えることがあると考える。また、家庭の事情に悩む親の離婚を経験した子どもたちは、家庭ではさらけ出すことができない複雑な感情を出せる場を求めている。親の離婚を経験した子どもたちが一日の多くを過ごす場として、学校は大きな役割を果たすことが可能であると考えられるが、教員がそのような子どもたちの支援に悩み、不安を抱えている状態ではその役割を果たすことは出来ない。

そこで、石野・立花（印刷中）は、親の離婚を経験した子どもに対する教員の意識について藤田ら（2014）の調査をもとにより詳しく学校現場の実態をとらえ、教員の意識を細かく明らかにするために、島根県内の小学校教員に対して質問紙調査を行った。その結果、教員が行う支援は、子どもを傷つけないための配慮であることが多いこと、しかし、その支援の多くは、教員個人の判断によって行われていることが明らかとなった。また、多くの教員が、子どもたちがどのような支援をしてほしいか理解していないこと、親の離婚を経験した子どもに対して困り感を感じている教員は少ないことも明らかとなった。学校全体の取り組みは情報共有程度しか行われておらず、支援体制が整えられていないこと、体制づくりの必要性を感じている教員が少ないことも明らかとなった。さらに、親の離婚については、時間の経過とともに解決できると考えている教員もいた。この、教員がもつ、親の離婚を経験した子どもに対する認識や現在実際に取られている対応や支援は、本当に妥当なものと言えるのであろうか。

本研究では、石野・立花（印刷中）の調査結果をもとに今後の親の離婚を経験した子どもへ

の支援の在り方を提案することを目的に、実際に親の離婚を経験した大学生に面接調査を行う。

II 方法

1. 調査対象者

親の離婚を経験した大学生4名を対象に面接調査を行った。

2. 調査手続き

筆者の知人に依頼した。その後、被面接者のもとへ出向き面接調査を行った。

3. 調査時期

2016年12月中旬に行われた。

4. 調査内容

親の離婚を経験した子どもに対する教員の意識調査(石野・立花, 印刷中)の結果と、それをもとにした考察を、実際に親の離婚を経験した大学生に示し、学校現場における親の離婚を経験した子への支援について意見を聞く面接調査を行った。まず、質問紙調査の結果についての感想を被面接者から聞き当時の経験などをもとに意見をもらった。その後、筆者の考察を説明し、筆者の考察についての意見を話してもらい、当時経験した教員からの支援や配慮を聞いた。インタビュー時間は一人当たり60分から90分であり、すべて許可を得て録音をしている。

III 結果

1. 22歳 女性 父子家庭

《調査結果を受けて》

(「ややそう思う」, 「あまりそう思わない」が多いのは) 日本人らしい結果ですね。「あまりそう思わない」っていう人は多分「そう思わない」んだろうなあと思います。

「親の離婚は子どもの集団生活の適応を悪くする。」って思っている人がいるということはそういう子(実際に集団生活の適応が悪かった子)が前例としていたんですね。また、「親の離婚は子どもにいい影響を及ぼす。」とは思ってない。そりゃそうだと思います。

自分が経験した中でもう少し欲しかったのは、「親の離婚を経験した子どもの第二次性徴の際、配慮をしている。」です。せめて保健の先生でもなんでもいいので教えてくれないと、生理用品の付け方や下着について相談できる人やタイミングが分からなかったです。とにかく何も分からなかったので。お父さんにも友達にも聞けないですし。全くそう思わないと思う先生がいるのはまずいと思います。担任の性別が違うなら保健の先生や学年担任の先生に気にかけてほしかったですね。

(「親の離婚を経験した子どもに対して特別な支援が必要である。」という質問項目に対して) 特別な支援はあってもなくてもいいと思います。本人が望んでいたり、環境があまりにも悪いならするべきでしょう。親が一生懸命カバーしようとしていることもあるから、親の意見を大切にすべきではないでしょうか。

「子どもは離婚の理由を知らされているか把握している。」人(教員)が少ないですが、子

どもがどこまで知っているかをきちんと把握しておかないとまずいのではないのでしょうか。同級生の中で出回っている噂によって（親の離婚を経験した）子どもが傷つくこともあると思います。そういうとき（教員が）フォローできるようにしておかないといけないのではないのでしょうか。

「子どもの家庭が離婚をした時、子ども本人と話し合う。」と回答した人が非常に少ないですね。（教員に対して）無理して話し合えとは言わないですが、（子どもとの話し合いの）時間を作るべきだとは思いますが。家で話せないこともありますから。もし難しいならカウンセラーを紹介するという方法もあるのではないのでしょうか。子どもにとって親の離婚は一世一代のイベントです。子ども本人と話し合う時間は取った方がいい。子ども本人を呼び出すと周りの子が気にするから（親の離婚を経験した）子ども本人とは話し合わないのでしょうかね。一番大事なのは物事が起こった直後ですが、多少時間が経ってからでも（子どもと）話はすべきです。案外起こってすぐには涙が出ない子から涙が出てくるかもしれません。話し合う時間は絶対取るべきだと思います。（教員が子どもと話をしないのは）触らぬ神に祟りなしという感じですかね。話を切り出しにくいのかなとも思いますが、今後のためにも子ども本人と話すべきでしょう。

「勤務校には親の離婚を経験した子どもに対する理解や支援のための校内での何らかの研修が必要である。」についてあまりそう思わない人が圧倒的です。研修なんかしなくても（教員が）私たちできますってという自信があるのでしょうか。

また、（自由記述「離婚」を特別視するのではなく、学習生活面で配慮が必要な児童に支援してきたつもりである。」について）つもりであるという自分を正当化した書き方に違和感を覚えました。

（自由記述から）特に私たちの時代は、（学校で）父の日・母の日を問答無用とする時代でした。気にする子どもとしない子どもはいると思いますが、私は気にしましたね。離婚直後に（授業で）お母さんの絵を描きましょうと言われ、心の中でやさぐれました。「覚えている範囲でいいよ」「無理はしなくていいよ」と（教員からは）言われましたが、他の子が黙って黙々と描いている状況で、一人白紙で出す訳にはいかないじゃないですか。少し抵抗しましたがしょうがないから描きました。その日は（家に）帰ってクレヨンをもって部屋で泣きました。さらに、（後日）その絵を教室の後ろに掲示されたときは親の離婚という事実に関心しなければならなかったため、つらかったです。

《考察について》

筆者の言いたいことはとてもよく分かります。学校現場がこれではダメだと思うのはそういう時期（子どもの時期）を乗り越えた私たちだからこそ分かることです。親の離婚を100%乗り越えることはないですからね。

担任を信頼していないと子どもから相談できません。（教員は）相談したいときや先生から呼び出されたときにその子が感じる周りの目にも気を付けなければならないと思います。離婚直後は子どもも混乱していて話しにくいかもしれませんが、「自分は見方だよ」という先生の声掛けがあった方がいいと思います。話すかどうかは本人の意思ですが、（教員が）声掛けをすることは大事ですね。

私は、第二次性徴の時に保健室の先生に報告をすると、その保健の先生が、「先生からのお祝い、内緒ね」と言ってクッキーと手紙をくれました。「一步大人に近づいたね。困ったことがあったら相談してね。」といった内容だったと思います。そういう支援をされると嬉しかったです。やはり周りの子に見えないところで支援されるのは嬉しいですね。

先生が「いつでも話聞くからね」というオープンな姿勢でいること、そして、話してもらえ信頼される先生になることが大切だと思います。

《親の離婚について》

大学に来ている子を見ると裕福だと思います。大学の先生から裕福な家庭で育った子と比較をされて傷ついたことはありました。周りの友達に裕福な子が多いと、自分の家庭環境を話せないですね。いろいろな家庭事情はあるかもしれませんが、両親が揃っているだけ立派だと思います。親がいなくなってみないとそのような子どもの気持ちが分からないと思いますね。お母さんに捨てられたんだという思いはありました。また、知らないところで再婚していた時のショックは何歳でも変わらず大きいと思います。担任は特に変化に気付きやすいから少し声をかけてもらえるだけで（子どもは）うれしいと思います。

《まとめ》

面接調査から得た親の離婚を経験した子どもへの支援について、被面接者は、学校現場における親の離婚を経験した子どもへの支援についての考え方には当事者からすると違和感があり、このままではいけないと考えているようであった。具体的な指摘をまとめると、以下の三点である。

(1) 監護親が異性の場合に、第二次性徴には特に気を付けるべきであり、その支援は、担任だけでなく養護教諭など他の教員が行う必要がある場合もある。

(2) 親の離婚を経験した子どもがどのような情報を持っているかを担任はきちんと把握しておき、子どもと話をする時間を設ける必要がある。

(3) 支援をする際には、親の離婚を経験した子どもが感じる周りの子どもからの視線を気にする必要がある。

2. 21歳 女性 父子家庭

《調査結果を受けて》

(結果を見た印象として)これが先生たちの本心なのかなと思いました。(「あまりそう思わない」が多いことに対し、教員の子どもに対する)遠慮が隠されている気がしました。私は(親の離婚時に)小学校1年生の時だったから本人と話し合う必要はなかったですが、もう少し上の年齢なら話せる人が欲しかったかもしれません。(教員が子ども)本人と話してくれた方がいいなあと思いますね。やっぱり子どもから不安を話しにくいので。(教員が)聞いてくれないと言えないです。そういう意味でははじめと一緒に声をかけられてようやく(子どもは)しゃべれると思います。

「親の離婚は友達関係を悪化させる。」は「あまりそう思わない」ことはないだろうと思います。(親の離婚を経験した)その子自身がどういう子かにもよりますが、自分が先生の立場なら友達関係が悪くなるんじゃないかなって思ってしまうような。(子ども達の中でも親の

離婚を経験した子に対して) 遠慮が生まれてしまうと思うので。お母さんの話は出さないように気を使われるとか。子ども同士でも。私自身、家庭のことでちょっと近寄りにくいと友達から思われていて(友達と) 馴染めない時期がありました。

「勤務校には親の離婚を経験した子どもに対する理解や支援のための校内での何らかの研修が必要である。」や「勤務校には親の離婚を経験した子どもに対する支援やケアのプログラムが学校内に導入されることが望ましい。」と思っている人が少ないのは意外ですね。(研修やプログラムが) あった方が向こう(教員) から(子どもに) 声をかけてきてくれるのではないかと思います。先生も(子どもに) どういう声掛けをしていいのかわからないと思うので。私たち(親の離婚を経験した子ども) の気持ちはわからないと思いますよ。

「(子どもは非監護親との面会が可能な環境にいるか把握している。)」について) 会うのと会わないの、どちらがいいのかわからないですけど、それ(面会可能な状況であるかどうか) によっても支援(の仕方) は違いますよね。(非監護親に) 会っていたら(教員の子どもに対する) 支援がまた変わってくるんじゃないかと思いますが。(教員は子どもの面会状況について) あまり把握できていないんですね。(教員が子どもの家庭のことについて) どこまで把握しているかで変わってくると思います。(教員は子どもの家庭のことについて) 把握はしておいた方がいいと思うんですがね。(教員は) 離婚の理由もあまり知らないんですね。

(教員が) 事情を他の子に説明するときにはその子(親の離婚を経験した子) がいるところで説明するのでしょうか。自分がいるところで(事情を) 言われるのは嫌ですね。かといって、(教員に) 教室を追い出されるのも嫌ですけど。自分がいないところでこっそり話してほしいかな。

(表2-2の自由記述の回答を見て、教員は) なんて困ってないだろう。(教員には) 困ってほしいです。困ってないと言われると(親の離婚を経験した子に対して) 興味が無いと思われるように感じます。

《考察について》

(筆者の考察について) それは違うんじゃないかなと思うところはありませんが、(調査結果を) 肯定的に見てみると、教員はあえて子どもに直接話をしないんじゃないかなとは少し思いました。ただ、(私は) みんなの前では話してほしくないですが、先生との話し合いの場は欲しかったですね。家庭には(思いを) 吐き出す所がないので。子どもの時には特に(家庭で) 言えないです。廊下ですれ違う時に(教員から)、「ちょっと時間ある？」と声をかけられるくらいがいいなと思います。(離婚によって) 自分自身が変わったわけではないから(周りの人に) 過剰に反応されると嫌ですが、だからと言って何も気につけられないのは嫌ですね。(教員などの) 近い人からの声掛けが欲しいなと思います。カウンセラーを紹介してもらおうといった事でもいいので。

(学校組織としての支援の中に) 地域との連携についてはあまりないんですね。地域での(子どもたちの家庭事情の) 噂の広がりスピードはすごいです。そのあたりに先生が介入することは難しいかなとも思いますが、学校の体制としてそのような(地域の中での噂に対する) フォローが欲しいです。地域で流れている噂を、友達を通して聞くのが・・・地域差はあるかもしれないですが。

(学校で子どもに対して) 考慮する点としては(親の離婚を)入れてほしいですね。(親の離婚から時間が経過して周りの環境などが)落ち着いてきているからいいという問題ではないと思います。特別視をして欲しい訳ではなかったですが、ただ気にかけてほしいなど。いつになっても。ちょっとしたことでいつになっても気になるので。私は、母親が交際中であることを知ってショックを受けました。いつ別れたかだけでなく、真実を知るタイミングも大事だと思います。ですが、子どもが真実を知ったことを教員が知ることは難しい。だからこそ(教員には)子どもと話をしてほしいんですけどね。

実際に、高校の時に、先生にみんなの前で大きな声で家庭の話をされて嫌だったことがありました。みんなに(親が離婚していることを)知られたくないわけではないですが、みんなの前で言ってほしくはないです。傷つきますね。一対一で(話されることで)、ちゃんと気にかけてくれてるんだなと感じるとうれいんですけど。みんなの前で言われると、全く気にしてませんという明るい自分を演じています。自分が悪いわけではないのに、(親の離婚に対して)負い目を感じているので。

《当時を振り返って》

(教員が、私の)家の事情が分かっているため、完全下校時間が過ぎていても保健室で残らせてくれたことはありましたね。

また、当時、地域の子ども会で他学年(の子ども)から偏見の目で見られたことはありました。同級生と違って正しい情報が行き届いていないので。

(学校で)母の日、父の日はやった記憶がないです。親が離婚してから学校で泣いたことはずっとなかったですが、中学校で作文を書く時間に、「本心書いてみなよ。」と先生に言われました。本当のことを書いて先生の所に持って行き、職員室で話をした時に初めて泣きました。それは自分の中で(出来事として)大きくて、(気持ち)すっきりしましたね。他の先生も(私が泣いているのを見て)びっくりしたと思いますが、この出来事によって先生が(親の離婚を経験した子どもが普段隠している気持ちに)気づくことにもなったのではないのでしょうか。

《まとめ》

面接調査から得た親の離婚を経験した子どもへの支援についての被面接者の考え方をまとめると、以下のようなになる。

- (1) 教員は、子どもから家庭の話を切り出すことはなかなかできないため、親の離婚を経験した子ども本人と話をすべきである。
- (2) 親の離婚を経験した子どもへの支援についての研修やプログラムによって、教員からの声掛けなど有効な対応がしやすくなると思うため、研修やプログラムは必要である。
- (3) 学校だけでなく、地域での噂によって傷つく子どもへのフォロー等ができればよい。
- (4) 親の離婚から時間が経過しているから大丈夫であるという考えは実際とは異なる。今まで知らなかった情報を離婚から時間を経て知ることによるショックなど、離婚後の年数に関わらず、年齢や時期によって気にすることはある。
- (5) 変化に気づきやすい関係にある担任には特に声掛けをしてもらいたい。

3. 22歳 男性 母子家庭

《調査結果を受けて》

当時を振り返ると、自分も不安が強かったとは思いますが。特に自分の学校では、(親の離婚を経験した子に対する)配慮はなかった気がしますね。(自分は)気にしてなかったです。

父の日や母の日については、(学校で)出た覚えはありませんね。学校で、お父さんお母さんのワードが出たときに、「うちお父さんいねーわ」って思っていたか友達に話をしていた気がします。私たちの時には今ほど配慮なかった気がします。宿題で「お父さんになにかしてもらってね」とかあった気がします。

(「親の離婚を経験した子どもは担任やその他の教員に相談する」について、)家で言えない吐き出したい気持ちはありました。親しい友達には話をしていましたが、大きくなってからですね。でも、先生に話したことはないです。

(子どもの家庭との連携の結果を見て)離婚は子どもの知らないところで完結してしまいます。先生は親に聞いとけば子どもの様子が分かるだろうと思っても、親は親で話したくないことですから。

(学校組織としての支援方法を見て)離婚を経験した子どもに対してどう支援するか大学(教育学部)でもやらないですよ。いつまでそれ(離婚)に対して対応するかってこともあると思いますし。離婚した時期とその子の個人差は大きいですよ。

《考察について》

(筆者の)考えは間違っていないと思います。ただ、子どもの個人差をどうするかは問題ですね。例えば、構ってほしい子、構ってほしくない子、構ってほしくないように見せて構ってほしい子によって対応は異なると思うので。

(親の離婚について)触れないよりは触れてほしいですね。みんな(学校の子供達)ひとりひとり平等なんだけど(特別扱いはしないんだけど)、みんなが知らないところでちょっと構ってほしいという気持ちはあります。

《当時を振り返って》

親が再婚したときは、親の再婚よりも学校が変わって転校することがつらかったです。周りの大人からは(自分は)大丈夫(な子)だと思われていた気がします。でも学校は楽しかったので。再婚していった先の学校は楽しかったから再婚も意味あるのかなと思います。先生も周り(の友達)も良かった。環境に恵まれていました。

《まとめ》

面接調査から得た親の離婚を経験した子どもへの支援についての被面接者の考え方をまとめると、以下のようになる。

(1) 親の離婚についてあまり気にしたことはなかったが、家で言えない吐き出したい気持ちがあった。

(2) 親の離婚については、触れないよりは触れてほしい。周りの子に見えないちょっとしたところでの支援が欲しい。

4. 21歳 男性 父子家庭

《調査結果を受けて》

(親の離婚を経験した子どもに対する) 支援などはマニュアル化できることじゃないですからね。でも(教員の回答が)嘘っぽいなどは(結果を)読みながら思いました。もちろん、ちゃんとしてくれている人もいるでしょうが。例えば、本当に(日頃から)「子どもの監護親の力になりたい。」と思ってるんでしょうか。思っではいるんだろうけど、「そう聞かれたら思うっただけじゃないの?」と思います。実際、力になるために(普段)何かしているのかと思いますね。

自分自身は、先生に頼ったことがなくて、先生に話そうと思った事もなくて、というか先生じゃなくても誰にも話せなかったです。先生を信用してないとかそういうことじゃなくて。(自分は言えなかったけど)先生に助けてほしいと思う子どももいるのかな。

(自由記述の支援方法を見て)「お父さん・お母さんという言葉を使わない」などそこまでするんだと思いました。でも、確かに話題が出たときに、(親の離婚について)気にしないように頑張ることはありました。それ(気にしないように頑張ること)がづらいと感じたわけではないですが、つらいと感じないように頑張っていたのかもしれない。例えば、「お母さんの料理何が好き?」と聞かれたときに話をかわすのが今でも面倒くさいです。(親の離婚を)気にしてない子も、気にならないようにその話題をブロックしようとして、何かしらの負担がかかってしまうのではないのでしょうか。父の日や母の日(の扱い)は難しいですね。子どもに(父の日や母の日の文化を)経験させたり、感謝の気持ちを伝えさせたい気持ちは分かるけど自分がやるのは嫌だなと思います。

親の離婚を経験した子についての意識は、あまりそう思わないという回答が割と多いですね。先生たちのイメージと世間のイメージが違うのが意外だなと思います。(世間では親の離婚は子どもに様々な悪影響を与えると考えられていると思っているので)

「親の離婚を経験した子どもは元気がない。」のはしょうがないですよ。(親が離婚をしたのに)元気出るわけがない。

「親の離婚は子どもの学力を低下させない」と思ってる人がとても多いですね。小学校の勉強は真面目にするかどうか大きいと思うんです。って考えると(子どもたちの周りの)環境が変化して…それでも(子どもたちは)ちゃんと勉強しようと思うのかな、そこまで(子どもの)精神強いのかなと思いますけどね。(親の離婚が子どもの)学力を低下させるなど、(教員が)そう思っちゃいけないと思ってるんじゃないかなという印象を受けました。

回答している先生たちは(親の離婚を経験していないから)すべてイメージでしかないわけで。離婚されてうれしくはないですけど、(自分の)人生においてすごい悪い出来事だったかと思うとそうではなかったです。結果的に(子どもは)心が強くなるんじゃないですか。子どもの頃にきつい経験をしておくのも大事だと思います。

(「勤務校では、親の離婚を経験した子どもに対する理解や支援のための校内での何らかの研修が必要である。」の質問項目を見て)そもそも親の離婚を経験した子どもに対する支援の研修がないことに驚きました。(結果を見ると、教員は親の離婚を経験した子どもの気持ちを)分かってないじゃないですか。(研修を)やらないと分からないと思います。(親の離婚を経験

した子どもの気持ちについては) イメージだけで対応してるんですよね。そりゃ(教員が、親の離婚を経験した子どもの気持ちを理解することは) 100%は無理でしょうけど、イメージだけで対応されても困ります。先生の中にも親の離婚を経験している人はいるでしょうから、そういう人の声をきいて、もっと全員で(子どもの気持ちを理解するように努めるべきだと思います)。(親の離婚を経験した教員は) 経験話すのはあれ(快くはない)ですけど。(親の離婚を経験した子どもについての) 研修やるのって難しいんですかね。私たちのような子どもの気持ちを先生たちも知識として知っておけば、よりの確な対応が選択肢としてできると思うんですけど。(筆者が親の離婚による複雑な自分の気持ちを言葉で表現できずに泣いていたことから) 例えば、どうして泣いてるか分からなかったら先生もどうしていいか分からないし。もし知ってたらそういう子がいたときになんとか分かるかもしれないじゃないですか。研修とかで(親の離婚を経験した子どもたちの気持ちを) 知識として入れておくことは大事だと思うんですけどね。もちろん離婚によって受けた差は(子どもによっても) 個人差が大きいでしょうが。

「勤務校は、親の離婚を経験した子どもに支援がなされている」とか、「勤務校では、親の離婚を経験した子どもに対する理解・支援の意識が強い」とか。そう思う比率がとても高いですけど。(教員は) 何してるんですかね。(「勤務校は、親の離婚を経験した子どもに支援がなされている」、「勤務校では、親の離婚を経験した子どもに対する理解・支援の意識が強い」と比較して)「勤務校では親の離婚を経験した子どもに対する教職員の支援体制は整えられている。」(に「そう思う」、「あまりそう思わない」と答えた教員は) は少ないのに。先生たちも、下手に(親の離婚について触れることで) 地雷踏んでも(子どもたちを傷つけても) 困るでしょうね。実際、(当時の) 自分の担任の先生もどうしていいのかわからなかったと思います。自分自身が親の離婚でダメージを負ってなかったのかということそんなことはないと思うんですけど。

《考察について》

表に出さない子の気持ちを(教員が) 察知するのは難しいから。(子どもの気持ちを察知しにくいことは) 問題だなと思います。

また、保護者から様々な(家庭などの) 情報を引き出すには、先生がかなり信頼されている必要がありますよね。大事な情報を話して(その教員が) 何かしてくれると思われないと(保護者も) 話せないし。

親の離婚って、ぶっちゃけ他の人から「大丈夫?」って言われてもどうしようもないですよ(自分たちの気持ちを変えられないですよ)。(教員から) 特別扱いされるのは嫌、でも何も(支援が) ないのは相当メンタル強い子じゃないと無理だと思います。クラスで大々的に(支援してもらおう) っていうのは嫌です。変に周り(の友達) から気を使われるのは嫌だけ。(教員に) ほっとかれるのは、それはそれでつらい。(みんなの前では) その話題にそもそも触れられたくないし、話題をそらすのが面倒くさいなと思います。小さいころはそのこと(離婚のこと) は友達に言えなかったです。(親の離婚を経験した子が) 気にする部分は、父子家庭か母子家庭かでも変わってくると思います。

《当時を振り返って》

転校を伴う離婚だったからそう思うかもしれませんが、(親の離婚は) 転校がどうしてもセットでついてくると考えてしまいます。おばあちゃんの家に行くと決まってから、いつも一緒に遊んでた友達がいたんですが、「もう春から会えなくなるから、遊んでもしょうがない。別れる時に寂しくなるだけ。」と思って家に引きこもった時期がありました。自分の場合は転校したけど、いずれまた転校する 때가くると思ったから(転校先の学校で) 友達どうしようとも思いました。すでに形成されているコミュニティに入らなければならないから、それまで(自分が転校するまで) に先生が受け入れてくれる環境を作ってくれないと、(転校先の学校での友達の輪に) 入っていきづらいですね。(自分は) 転校に伴う不安が大きかったです。離婚に伴う転校が伴ってくると相当子どもの負担は大きいはず。

小学校のときは特に、(親の離婚に伴う) 気持ちを親に言えなくて。親のせいで自分が普通じゃない環境になったことに怒りを覚えたこともありました。おばあちゃんともほほしいんですが、(離婚による悩みを) 話そうと思えば話せた。でも兄弟とは話せないです。

当時、先生に一对一で話されたが、別にしてほしくはなかった。「またその(親の離婚の) 話題か」って思っていました。

《まとめ》

面接調査から得た親の離婚を経験した子どもへの支援についての被面接者の考え方をまとめると、以下ようになる。

- (1) 学校現場では実際にはほとんど支援が行われていないのではないかと考える。
- (2) 親の離婚について誰にも話ではできなかったが、放っておかれるのもまたつらかった。
- (3) 教員は、保護者から様々な情報を聞き出すためにも、保護者からの信頼を得ることが必要である。
- (4) 教員から特別扱いをされたり、周りの子から気を使われたりするの嫌であり、未だに気にしていないようにふるまうようにする。
- (5) 研修やプログラムによって、支援の選択肢が増え、的確な支援が可能になるのではないか。
- (6) 離婚に伴って転校の必要がある場合には、家庭内に事情を抱えた転校生を受け入れる体制づくりもしっかりしておいてほしい。

IV 考察

1. 面接調査から得た親の離婚を経験した子どもに共通する感情

4名の大学生に対して、面接調査を行い、調査結果や当時を振り返って考えることなど様々なことを語ってもらった。この調査から、共通した感情がいくつか見えてきた。以下に示すものが4名の大学生の面接調査から得た共通する考えや感情である。

- (1) 周りには離婚によって傷ついていないように明るくふるまっているだけで、離婚によるショックがないわけではない。
- (2) 親の離婚について家庭だからこそ表に出せない感情がある。
- (3) 親の離婚について学級など大勢の人の前で話をしてほしくないし、特別扱いしてほしいわけではない。

- (4) 周りの子に見えないところで配慮されるのは嬉しい。
(5) しつこく話されるのもつらいが、放っておかれるのもまたつらい。

2. 親の離婚を経験した子どもに対する支援の在り方

これらのことから、親の離婚を経験した子どもたちは、親の離婚によって生じた複雑な感情を表に出さないようにふるまっているだけであり、実際には大きなショックを受け、傷ついていることが分かる。もちろん子どもによって個人差は大きいですが、親の離婚を完全に乗り越えるには膨大な時間がかかり、幼い小学生のうちから完全に傷が癒えている子どもはほとんどいないと考えられる。そして、その複雑な感情は、学校ではもちろん家庭でも吐き出すことができずにいるのである。

したがって、子どもは親の離婚について学級などたくさんの子どもたちがいる前で、大っぴらに支援されるのをとても嫌がっている。さらに、親の離婚を経験した子どもたちは、周りの子と違うと思われたくないため、親の離婚を理由として特別扱いされることも嫌がる。このような支援は、どんなに教員が支援したつもりになっていても、むしろ逆効果であり、子どもを傷つけかねないのである。

しかし、親の離婚を経験した子どもたちが、教員からの支援を欲しがっていないわけではない。周りの子の目を気にしながらも、どこかで自分の気持ちに気づいてほしいという思いもある。そのため、他の子に見えない場面で小さなことでも声をかけてもらえるだけで救われた気持ちになることもあるのである。しかし、この時、他の子の前で話をしていないからと言って、しつこく話を聞いたりすることが、子どもの心の負担になりかねないことにも注意しなければならない。その子どもが不安や悩みを話さない時、その子は話をしないことで自分の心を傷つけないように守っている可能性もあるからである。バランスをとることはとても難しいが、適度な距離での関わりが大切なのである。

親の離婚を経験した子どもたちの心は、経験しなければ分からないことである。しかし、多くの教員がそのような家庭で育ったわけではない。そのため、経験のない教員は、自分たちが子どもの心を推測して支援しているに過ぎないことを常に意識するべきであると考えられる。そして、自分たちの現状の支援の在り方に満足するのではなく、その支援が適切であるのかどうか、親の離婚を経験した子どもの心を知ろうとする態度が非常に大切になってくるのである。

3. まとめと今後の課題

本研究では、親の離婚を経験した子どもに対する教員の意識調査（石野・立花、印刷中）を基に、実際に親の離婚を経験した大学生に対して面接調査を行った。その結果、石野・立花（印刷中）で明らかとなった学校現場の実態には、改善の余地があることが明らかとなった。また、合わせて、有効であると考えられる支援の在り方を提案することができた。

ところで、本研究では4名の大学生に面接調査を行った。これらのデータは、実際に経験された内容をつぶさに説明されたものであり、大変貴重で有益なデータである。ただし、大学生に児童期の回想をしてもらっているため記憶が変容していることや、人数の少なさから、これらの結果がすべての親の離婚を経験した子どもに当てはまるとは言い切ることができない。

親の離婚については、離婚の背景やその後の環境、子どもの知る情報量など様々な場合が考えられる。そのため、子どもの離婚の受け止め方や精神的な負担にも大きな個人差があり、確実に有効な支援を提案することは難しい。しかし、親の離婚を経験した子どもに対する支援をより充実したものにするためには、今後も親の離婚を経験した子どもに共通する支援を模索し続けることが必要である。

引用文献

- 藤田博康・石田真由子 2014 親の離婚を経験した子どものケアに関する教員の意識調査—小学校・中学校・高校におけるアンケート調査、インタビュー調査を通じて— 帝塚山学院大学人間科学部研究年報 16, 19-36
- 平松千枝子 2005 親の離婚を経験した子どものこころ—離婚を経験した親と子どもの調査から— 駒沢女子大学研究紀要 12, 155-171
- 石野陽子・立花春菜 印刷中 親の離婚を経験した児童に対する教員からの支援 (1) —小学校教員への質問紙調査— 島根大学教育学部教育臨床総合研究
- 厚生労働省 2011 世帯の状況 平成23年度全国母子世帯等調査結果報告
- 厚生労働省 2014 世帯数と世帯人員数の状況 平成26年国民生活基礎調査の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/index.html> (最終確認 2017年3月13日)
- 社団法人家庭問題情報センター 2005 離婚した親と子どもの声を聴く—養育環境の変化と子どもの成長に関する調査研究— FPIC出版
- 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会愛育研究所 (2016) 日本子ども資料年間2016 KTC中央出版, 195-197
- 棚瀬一代 2004 離婚の子どもに与える影響—事例分析を通して— 京都女子大学現代社会研究 6, 19-37

謝辞

本論文の作成にあたり、親の離婚という他者には話しづらい質問にも親身になって考えてお話しいただきました4名の大学生の皆様には厚くお礼申し上げます。